書評

米原正義著
戦国武士と文芸の研究

松原信之

国学院大学助教授米原正義氏を私が初めて知ったのは、国学院雑誌に掲載された「越前朝倉氏の文芸」の論文からであった。朝倉氏を研究していた私にとって、地元の福井では知り得ない数々の新史料を得て愁眉を開いた思いであった。その頃、国学院大学史学科に学んでいた幾田活司君にその補導教官として米原氏を推挙してから、私と米原氏との交際が始まり、一乗谷調査のため来福されて、一夜拙宅で時間を忘れて

朝倉氏について論じ合ったこともあった。一昨年の夏、米原氏宅を訪問した際、先生の膨大な原稿を目にして、その出版の一日も早からんことを念願したことであった。そしてついに昨年十月、一〇一二頁に及ぶ大著述が世に出た。

本書は、序章において、研究史の概観・研究の方法などを述べ、本論では第一章に能登の畠山氏、第二章に越前の朝倉氏、第三章に若狭の武田氏、第四章に出雲の尼子氏、第五章に周防の大内氏、第六章に駿河の今川氏について、それぞれの文芸的素養と活動の情況を詳述している。米原氏の恩師桑田忠親教授は、その序文の中で「その特色は、関係文献史料を徹底的に採集し、寸毫の脱落をも許さないと同時に、それらを厳密に吟味し論述した点にある。これは、各地方史にも精通した気鋭の歴史学者でなくては到底なし遂げえないところで、ひとえに、本書の著者の不断の努力と学問的情然の然らしめたところであろう。」と述べておられる。

私にとって関心の深い第二章越前朝倉氏の文芸については、桑田教授の書評そのものであり、到底、越前においては集め得ない貴重な史料をも数多く含んでおり、恐らく、朝倉氏の文芸についてまとまったものとしては、今後これ以上のものは生まれないであろう。越前一乗谷を訪問した中央の公家文化人の詳細な一覧表は目を見張るものであり、また単に文芸のみに限らず、朝倉氏や家臣の動向についても実に詳しい。一例を上げれば、越前朝倉氏の祖、広景は実在しなかったのではないかと考えられていたが、実在したと伝う明確な史料や、朝倉氏と公家との婚姻関係表など様々である。少なくとも、中世史を学ぶ者にとっては、当然座右に置くべき名著と云っても過言ではあるまい。

米原氏から受けた学恩の一部でも報謝できることを念願して、ここに一文を呈した。

（桜楓社刊　頒価一八、〇〇〇円）